PHOTO EXHIBITION 2014 ①

展評'14

時代の精神展 第2回
オサム・ジェームス・中川写真展

沖縄―オキナワ―OKINAWA

京都造形芸術大学 ギャルリ・オーブ
11月22日～12月14日

撮影：早瀬道生

オサム・ジェームス・中川は1962年ニューヨーク生まれ。80年代から写真制作をはじめ、96年から米インディアナ大学准教授。「時代の精神展」は、京都造形芸術大学の学生が作家と展覧会、ワークショップを運営するプログラムのひとつ。企画委員は同大の椿昇教授、竹内万里子准教授。

◎評：林田 新

はやしだ・あらた　1980年生まれ。専門は、写真史／写真論。関西大学、京都精華大学等で非常勤講師を務める。主な論文に「長崎の皮膚：『〈11時02分〉NAGASAKI』」（『現代思想 5月臨時増刊号 総特集＝東松照明 戦後日本マンダラ』青土社、2013年）等。http://www.arata-h.com/

弾痕　2006年（「リメインズ」から）

近代以降、過去を理解可能なものとして再構成し、記憶するための「知」を担ってきたのは歴史学であった。それは過去の出来事を、もっぱら筋書きを持った物語として記述してきたのである。しかし、物語のみが歴史の記述に寄与してきたわけではない。様々な造形芸術もまた、過去を顕彰し記憶を共有するための縁を担ってきた。しかし、写真にとって、過去の歴史に取り組み、それを表象するということはそう容易いことではない。いうまでもなくカメラは過去を撮影することはできないからである。

カメラには写らない過去と記憶

写真展「沖縄―オキナワ―OKINAWA」を構成していたのは、「リメインズ（Remains）」「バンタ（Banta）」「ガマ（Gama）」という沖縄の歴史に取り組んだ三つのシリーズである。アメリカを活動拠点とする写真家オサム・ジェームス・中川の沖縄三部作が一堂に集められるのは、今回が初めてのことであるという。

展覧会場に足を踏み入れると、最初に展示されていたのが「リメインズ」である。そこには、沖縄に今も残る戦跡、かつて・あった戦争の痕跡を撮影した写真が、その被写体の名前を日本語と英語で記述した言葉――「bullet holes／弾痕」「tank／戦車」「memorial／慰霊碑」など――とともに提示されていた。痕跡とは、かつて・あった何かが刻みつけていった痕であり、それゆえそれを見るものの意識を過去へと誘っていく。「リメインズ」が写しだす可視的な戦跡の現在の姿が、カメラには写らない不可視の過去、かつての戦争にまつわる様々な記憶を見るものの内に呼び起こしていく。と同時に、その戦跡が二つの言語で記述されることによって、想起される記憶の内実が日米間において異なりうることを見るものに意識させる。

「リメインズ」に続いて展示されていたのが「バンタ」である。バンタとは、崖を意味する沖縄の方言で、海と陸を仕切るかのごとく聳え立つ断崖絶壁を指す。ジェームス・中川は、沖縄三部作を制作するにあたり、積極的にデジタル技術を活用している。本作では、バンタを撮影した膨大な数のデジタル画像を、パソコン上でパースペクティブを調整し、それらを1枚の画像へと合成したうえで、1㎞を超える縦長のフォーマットで出力している。その結果、カメラの視覚による遠近法的な空間秩序から解き放たれた岩肌の過剰な細部が、強烈な存感感をもって見るものの眼前にせまってくる。「リメインズ」との関連の内に「バンタ」を見るならば、切り立ったバンタの聳え立つ高さ、えぐられた岩肌の肌理から、そこに向かって米軍が放った「鉄の嵐」と称されるほどの激しい砲撃や、そこから身を投げ自ら生命を絶った人々といった、バンタをめぐる戦争の記憶を想起するだろう。しかし、それと同時に、人間の情報処理能力を超えるかのようなバンタの過剰な細部を凝視しているうちに、隆起した珊瑚礁が今日の沖縄の大地を形成するまでの、非人間的な地球的時間もまた呼び起こされてくるのである。

Gama #006　2009年（「ガマ」から）

生者と死者が出会う境界

「バンタ」シリーズの隙間を通り抜けて奥へと進むと、そこには「ガマ」が展示されている。沖縄には石灰岩が浸食されてできた鍾乳洞が多数あり、沖縄の方言でそれはガマと呼ばれている。ジェームス・中川は、闇黒のガマの内部に入り、本作を撮影している。彼は、ストロボを1点から焚くのではなく、懐中電灯を動かして、その光をガマの壁面をなぞるように照射し、シャッターを開放したカメラの内にその光を取り込んで露光する。その後、デジタル技術を用いて長い時間をかけて色調を調整し作品を完成させる。そのような手続きを通じて、闇黒のガマの内部空間が、鮮やかな色彩と豊かな細部をともなって立ち現れてくる。焼け焦げた壁の黒さ、海の塩分が蒸発し結晶化した壁面、地面に残された薬瓶や試験管、薬莢や手榴弾、茶碗のかけら、そして今なお残る遺骨。そうした方マに刻みつけられ残された痕跡によって、かつてガマが、避難壕、野戦病院、陣地壕の役割を担っていたこと、そこに向けて米軍が火炎放射器を向けたこと、そこで様々な凄惨な事態が生じたこと、そうした痛ましい負の記憶が否が応にも想起される。と同時に、鍾乳石が形作る多種多様な形状が、それを形成してきた果てしない時間を喚起する。また本作では、本来、闇黒であるがゆえに不可視なはずのガマの内部空間が、調整された色彩とともに可視化されている。そのことが、現実のガマに基づきつつも、同時に、そこから別の世界へと遊離していくような異様な気配を本作に付与している。そうして「ガマ」に立ち現れてくるガマの世界、それは、この世ならざる霊魂たちが住まう神聖な世界、生者と死者が出会う境界的な世界なのである。

Okinawa #007　2008年（「バンタ」から）

戦争の痕跡を触媒に

かつての戦争の遺物（リメインズ）に導かれ、観客は、切り立った断崖（バンタ）の隙間を抜けて洞窟（ガマ）の奥へと歩みを進めていく。その歩みの中で沖縄の現在に潜勢する歴史的時間が呼び起こされてくる。それは、物語として記述される歴史とは異なった時間である。この沖縄三部作を通じて私たちは、例えば、探偵が犯行現場に残された痕跡を通じて、そこで起こった事件を実証的に再構築するのではない。私たちに求められているのは、痕跡を触媒にして、かつて・あった沖縄戦の記憶を、沖縄の大地の記憶を、この世ならざる死者たちの記憶を、いま・ここにおいて想起し、賦活することなのである。